

第10回 直和と基底の取りかえ



1. 直和

以下、 $K = \mathbb{C}$ or \mathbb{R} , V を K 上の線型空間、 W_i ($i = 1, \dots, k$) を V の部分空間とする。

定義

$U = W_1 + W_2$: W_1 と W_2 の直和

$\stackrel{\text{def}}{\iff}$ 全てのベクトル $\mathbf{u} \in U$ が $\mathbf{u} = \mathbf{w}_1 + \mathbf{w}_2$ ($\mathbf{w}_i \in W_i, i = 1, 2$) と一意的に表わされる

このとき $U = W_1 \oplus W_2$ で表わす。

命題 次は同値:

- (1) $U = W_1 \oplus W_2$
- (2) $W_1 \cap W_2 = \{\mathbf{0}\}$
- (3) $\dim U = \dim W_1 + \dim W_2$

一般の場合

$U = W_1 + W_2 + \dots + W_k = \{\mathbf{w}_1 + \mathbf{w}_2 + \dots + \mathbf{w}_k \mid \mathbf{w}_i \in W_i\}$ と定め、全てのベクトル $\mathbf{u} \in U$ が $\mathbf{u} = \mathbf{w}_1 + \mathbf{w}_2 + \dots + \mathbf{w}_k$ ($\mathbf{w}_i \in W_i$) と一意的に表わされるとき $U = W_1 \oplus W_2 \oplus \dots \oplus W_k$ と書き W_1, W_2, \dots, W_k の直和という。

2. 基底の取りかえ

$\mathcal{S} = \langle \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n \rangle, \mathcal{T} = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$: V の基底

命題

- $\varphi_{\mathcal{S}} : V \rightarrow K^n$ を $\varphi_{\mathcal{S}}(c_1 \mathbf{u}_1 + \dots + c_n \mathbf{u}_n) = {}^t(c_1 \ c_2 \ \dots \ c_n)$ と定めると $\varphi_{\mathcal{S}}$ は同型写像
- $\Psi : \{V \text{ の基底} \} \rightarrow \{\varphi : V \rightarrow K^n, \text{同型写像}\}$ を $\Psi(\mathcal{S}) = \varphi_{\mathcal{S}}$ で定めると Ψ は全単射

定義

$\varphi := \varphi_{\mathcal{S}}$ と $\psi := \varphi_{\mathcal{T}}$ は同型写像だから $\varphi \circ \psi^{-1}$ も同型写像である。ここで $\varphi \circ \psi^{-1}$ は K^n の同型写像 (線型変換) であるから、 n 次正則行列 P が存在して $\varphi \circ \psi^{-1} = T_P$ となる ($T_P : P$ から導かれる線型変換)。この P を基底の取りかえ $\mathcal{S} \rightarrow \mathcal{T}$ の行列という。

命題

$\mathbf{v}_j = \sum_{i=1}^n p_{ij} \mathbf{u}_i$ ($j = 1, \dots, n$) と表わしたとき、 n 次正方行列 $P = (p_{ij})$ は基底の取りかえ $\mathcal{S} \rightarrow \mathcal{T}$ の行列